

## 「пора+不定形」の構造における動詞の体と語義の問題によせて

中澤 英彦

### 1. 体の研究の現状と本論の目的

ロシア語動詞の体[アスペクト]<sup>1)</sup>の研究史<sup>2)</sup>は長く、多様であるが、1970年代までに、様々な研究が、完了体と不完了体それぞれに当てはまる一般的意味(不変的な意味)抽出の方向に収斂したといえよう。研究者はいかにして複雑多様な体の現象を単一の規定に組み込むか、また単一の規定とはなにかを探求した。その際、完了体と不完了体の対立を、等価的対立ではなく、完了体を有標項とする欠如的な二項対立 privative opposition<sup>3)</sup>とみなし、対立の弁別的特徴を完了体の不変的な意味、全一性(動作の開始、継続、終了段階を別々に区別せずひとまとまりとしてみること)とする考えが主流であった。もちろん、同じ欠如的対立の原理に立ちながらも、完了体の不変的な意味を限界性に求めようとする研究方法やまた限界性と全一性との折衷を図ろうとする方向などもあったが、それらは同工異曲の感があった。

それに対して、1980年代には、完了体の全一性や限界性の特徴という表現に見られるように、一方の体の、何らかの特徴に基づき体の体系を構築しようとする研究の方向性自体を批判する立場があらわれた。その典型がグロヴィンスカヤ<sup>4)</sup>である。彼女は、体の研究史に現れた意味特徴による体の規定はことごとく矛盾を含むと指摘し、従来の接近法(彼女は特徴偏重型とよぶ)では、体の言語現象の本質はつかめないと主張して、動詞の意味的な型による体の対立の体系の構築を目指している。

この批判を一つの契機に、体研究の再検討が始まった。その後、従来の研究を修正・発展させようとする研究方法が現れる一方、語義解釈から体の体系を再構築しようとする方向が研究の中核をなし、それに、語用論、認知言語学の知見を用いて体の本質に迫ろうとする研究が加わったというのが研究の現状である。

このような状況を踏まえて、体の体系全体の再構築を射程に入れつつも、まず、完了体、不完了体各々の一般的意味を抽出する前段階である個別的意味を、具体的な動詞語義の分析を通して検討することを我々は近年研究テーマとしてきた。

本論では、個別的意味のうち、不完了体の一般的事実の意味、特に動作着手の意味を中心に意味・語彙面から分析する。対象は「述語副詞<sup>5)</sup>пора+動詞の不定形[不定詞]」である。

不定形は動詞の持つ文法的なカテゴリーである時制，人称，性，数の影響がなく，比較的純粋な形で体という文法的意味と語彙の相関関係を観察できるからである。言語資料は電子コーパス<sup>6)</sup>による。

## 2.1. 体の意味の階層

これまで漠然と体の一般的意味，個別の意味と述べてきたが，その関係を略述しよう。

体の意味の分析過程は，時間系列的には，まず，多種多様な現実の言語現象の分析により様々な（付加的な）意味・ニュアンスが選択・抽出され，その抽象化により少数の個別の意味グループが抽出される。そこから最終段階として完了体，不完了体の現れすべてに適用可能な一般的意味が抽象されるのである。

したがって，完了体，不完了体の意味は，それぞれ，抽象度の高い順に，一般的意味，個別の意味，付加的な意味・ニュアンスという3つの階層をなすことになる<sup>7)</sup>。

この3つの階層はいわば化学平衡の関係にある。付加的な意味・ニュアンス，個別の意味の規定はそのまま一般的意味の規定につながるので，一般的意味の再検討が迫られているいま，個別の意味，付加的意味・ニュアンスの再検討が喫緊の課題なのである。

ところで，本論は一般に個別の意味の階層に現れるとされる不完了体の一般的事実の意味<sup>8)</sup>を主に扱うので，次に個別の意味を本論に必要な範囲で略述しよう。

## 2.2. 個別の意味の体系と一般的事実の意味

先行研究の記述する個別の意味の種類および相互の関係はまちまちであり<sup>9)</sup>，普遍的に認められる統一的な分類はない。しかし，マースロフが1959年に行った体系化<sup>10)</sup>はその後の研究の原型とも言える存在で，現代でもさまざまな研究の基礎をなしている。そこで下にマースロフの体系をあげよう。

### 完了体の個別の意味

#### 1. 具体的事実の意味 конкретно-фактическое значение

Он повторил<sup>11)</sup> мне свой вопрос.                   彼は私に質問を繰り返してくれた。

#### 2. 一括化の意味           суммарное значение

Он несколько раз повторил свой вопрос.   彼は数回自分の質問を繰り返した。

#### 3. 例示的な意味           наглядно-примерное значение

Если вы не поймете мое объяснение, я всегда могу повторить его вам.

もしも私の説明がお分かりにならないならば，私はいつでもあなたにそれを繰り返してあげましょう。

不完了体の個別的意味

1. 具体的過程の意味      конкретно-процессное значение  
Молодая женщина сидела у окна вагона и читала.  
若い女性が車両の窓辺に坐って読書をしていた。
2. 無限定反復の意味      неограниченно-кратное значение  
Иногда я перечитывал писателей, которых особенно любил.  
時々私は特に好きな作家達を読み返しました。
3. 一般的事実の意味      общефактическое значение  
Вы читали эту повесть? В каком журнале вы ее читали?  
あなたはこの中編小説を読んだことがありますか。  
どの雑誌でそれを読んだのですか。

その後ラッスードヴァが、この体系に、完了体と不完了体の競合の起こらない強い対立と競合の起こる弱い対立という新しい考えを導入して構築した体系<sup>12)</sup>を、マースロフが取り入れて再構築した体系<sup>13)</sup>が現代の体研究では基礎となっている。

マースロフの新旧の体系でも、ラッスードヴァのものでも、問題となるのは不完了体のもつ一般的事実の意味である。この意味は、完了体の意味領域とされる動作の完了の意味を含意し（上の例で、読んだことがある、というのは読了していても構わない）、時には完了体の一般的意味とされる全一性をもつことがある。そのため、その厳密な規定および位置づけが困難で、完了体と不完了体の意味の体系化の妨げとなってきた。

一般的事実の意味は過去形、未来形、不定形、分詞、および命令法に現れるが、いままで過去形以外はほとんど研究されてこなかった。本論では、不定形の分野の分析を行う。

### 3.1. 本研究の対象「пора+不定形」

本論の分析対象は「пора+不定形」（これを以後「構造」<sup>14)</sup>とよぶ。）である。この構造は、ロシア語において動作着手の意味をになう中心的な表現であり、動作着手の意味は、3.2.に見るように、不完了体本来の意味に基づいて発達するとされている。

この構造における体の意味は、命令法<sup>15)</sup>、および叙想語（modal な語）надо（必須である）、можно（可能である、許される）、нужно（必要である）、должен（～しなければならない）類+不定形の場合と共通性があり<sup>16)</sup>、この構造の分析は、モダリティ研究にも寄与する。

しかし、これまで「пора+不定形」の研究はほとんどされてこなかった。この構造は、ロシア語統語論では無人称文[非人称文]とされるが、無人称文の研究分野<sup>17)</sup>でも、不定形における体の研究<sup>18)</sup>でもほとんど触れられていない。

これから、ほぼ唯一の研究であるフォーサイス<sup>19)</sup>とラッスードヴァ<sup>20)</sup>の記述を検討し、折にふれて我々の研究グループの小川暁道<sup>21)</sup>の研究も参照する。

### 3.2. フォーサイスおよびラッスードヴァの研究

フォーサイスは現代における体研究の先駆的存在であるが、斯学の基礎文献とされる著書の中で、「Sentences with the predicator *пора* «it is time» tend to have imperfective infinitives. <sup>22)</sup>「述語 *пора* を伴う「it is time する時だ」という文は不完了体の不定形をとる傾向がある。」と述べている。その理由は、「*надо* (必須である) や *нужно* (必要である) という述語を伴う構造と同じと思われる。そこで示される動作は既定のプログラムの一部と認識されるので、動作を新しい概念として完了体的に提示する必要がない。遂行する時間になった動作を単に名指せばよい。このような文では動詞不定形ではなく、述語自体が陳述の重要な意味内容をになう。」という主旨のこと述べている。この説明の真偽は後に検証するとして、彼の「不完了体の不定形をとる傾向」「既定のプログラムの一部」「動作を名指せば」という指摘は注目に値する。

ラッスードヴァはどうであろうか。彼女によれば、「ある体の意味がある領域で制限される場合には付加的ニュアンス *отенок*<sup>23)</sup>をもつのがふつうであり、,,,(中略—中澤) 不完了体不定形の基本的な付加的意味 *значение* は発話時点における動作着手の意味である。この意味は体本来の意味に基づいて発達する。話し手の注意は動作そのものにより集中し、それは動作の全一性の観念 *представление* と矛盾する」からである。

はたしてこれら先行研究は言語現実を正確に反映しているであろうか。

### 3.3. 電子コーパスによる分析

我々は、先行研究の検討を、電子コーパス<sup>6)</sup>を資料として数量的観点および論理構造分析の観点から行った。

コーパスは、先行研究の資料と可能な限り条件をそろえるため、おもに文学作品、新聞、雑誌から収集・作成してある。

コーパスは、総容量 55947 ファイル(504MB)である。内訳は、1990年代—2000年代の文学作品(・Русская проза 1990-х - 2000-х годов (<http://lib.ru/NEWPROZA/>)) 総数 314 ファイル(45.9 MB), 新聞雑誌 Независимая газета CDHG-98(Независимая газета, 1999年製作), 総数 16934 ファイル(132MB), Независимая газета CDHG-99(Независимая газета, 2000年製作) 総数 17423 ファイル(138MB), Независимая газета CDHG-2000(Независимая газета, 2001年製作) 総数 16445 ファイル(141MB), Независимое Военное Обозрение CDHBO-5 Версия 1.1(Независимая газета, Независимое Военное Обозрение, 2000年製作) 総数 4831 ファイル(45.9MB) である。

このコーパスは、ロシア語標準語における書き言葉の調査資料としては、質量とも十分であろう。

この中から「*пора*+不定形」を含む構造を抽出し、体の選択に関与すると思われる結合を抽出・分析したのが以下の表1から表6である。

表 1 「述語副詞 пора+不定形」における不定形の体の比率

	完了体	不完了体	合計
Пора бы <sup>24)</sup> (表 4 の合計)	50(87.7%)	7(12.3%)	57
Уже пора+不定形	16(36.4%)	28(63.6%)	44
Не пора ли	50(76.9%)	15(23.1%)	65
上記以外の Пора+不定形	588(52.2%)	538(47.8%)	1126
合計	704(54.5%)	588(45.5%)	1292 (100%)

この結果(表 1)は、先行研究の結論が言語現実に一致しない事を示している。пора と共起する動詞の体は完了体が多く、先行研究の結論と唯一適合するのは副詞 уже (すでに, もう) に「пора+不定形」が後続する場合のみである。

これはどう理解すべきであろうか。これからその原因を含めて、問題となる点を順々に検討していこう。

### 3.4.1. 「пора+不定形」の構造の分析

まず、我々は「пора+不定形」の пора の分析からはじめる。

伝統的な統語論研究および体の先行研究では下の文(1)、文(2)のような並行関係と※印の伝統文法の考え①～⑥からこの構造を捉えてきた。

(1) Пришла 到来した きのこの грибная 季節が пора. きのこの季節がやってきた <sup>25)</sup>  
過去単数女性形 形容詞主格女性形 女性名詞主格

(2) Пришла 到来した 時が пора 集める собирать きのこを грибы. きのこ狩りをする時がやって来た。  
過去単数女性形 名詞? 不定形 女性名詞複数対格

※伝統文法の考え— 語の形態に基づく統語論の考え

①名詞は形容詞の修飾語をとりうる。

②主語となる名詞は文の述語の文法的形態(性、数、人称)を決定する。

文(1)では、主語 пора に形容詞の修飾語 грибная があり、ゆえに пора は女性名詞で、これが述語動詞の形(女性単数形)を決定している。同様に、文(2)も пора が修飾句(不定形の句)を伴い、動詞の形(女性単数形)を決定(これを名詞性と言おう)しているので、文は、пора を名詞(主語)とする人称文(主語を持つ文)ということになる。

では、伝統文法では「пора+不定形」型の無人称文はどう規定されるであろうか。

③無人称文というのは主格形の主語のない文である。

④主体(意味上の主語)は、まれには対格形、通常与格形で表される。

⑤無人称文の述語は名詞と同形であっても形容詞の修飾語を取らず、性・数・格による変化がない。ゆえに述語副詞とされる。

⑥述語(動詞、動詞形)は三人称(過去時制では中性形)単数となる。

たしかに文(2)の述語(動詞)は中性形ではなく、女性形である。こうして、統語論的観点からは、文(2)は人称文であり、無人称文および「пора+不定形」の分析対象から除外され、フォーサイス、ラッスードヴァによって扱われなかった。

しかし、はたしてこれは言語現実を忠実に反映すると言えるであろうか。問題は пора の無人称性である。

周知のごとく、無人称文の述語は動詞述語と非動詞述語に大別される。動詞述語の文は動詞の時制のパラダイムにより、時制が形態的に示される。非動詞述語の場合には、a. 文が事態確認の場合には быть (英語の be 動詞) のパラダイムで示され、b. 変化(位相)等を表す場合には他の動詞が用いられる。いずれの場合も過去時制では動詞は単数中性形(-oに終わる形)をとる。

(「холодно 寒い」を非動詞述語の例として下に示した。なお、x.,п.,inf.はそれぞれ холодно, пора, 不定形の略である。「位相」は位相(変化)\*印は存在しない事を表す。)

先行研究の法・時制体系  
現実法

コーパス資料の示す пора の法・時制体系

	a. 事態確認	b. 「位相」	a. 事態確認	b. 「位相」
現在形	寒い Х.	なりつつある 寒い Становится x.	~する時だ П. inf.	なりつつある、~する時 *Становится п.inf.
過去形	寒い だった 寒い Было x.	寒くなりつつある なった 寒い Стало x.	~する時だ ~する時だった Было п. inf.	~する時になりつつある なった/訪れた、なった ~する時 *Стало/Наступила п. inf.
be 動詞過去中性形 述語副詞	寒かった だろう 寒い	寒くなった なる 寒い	~する時だった だろう~する時	~する時になった/訪れた、なった なる/訪れる、なる ~する時
未来形	Будет x.	Станет x.	Будет п inf.	*Станет/Наступит п. inf.
非現実法	寒くなるだろう だったら 寒い	寒くなる なったら 寒い	~する時になるだろう だったら ~する時	~する時になる/訪れる、なる なった/訪れた、なった ~する時
仮定法	Было бы x.	Стало бы x.	Было бы п.inf.	*Стало/Наступила бы п.inf.
命令法	なし	寒かったらなあ なしたらなあ	~する時だったら	~する時になった/訪れた、なったら

このような先行研究の考えからすれば、

無人称文	時だ 寝る Пора спать.	寝る時だ.
	述語副詞 不定形	

の пора は非動詞述語なので、「холодно 寒い」と同じ文法行動を取るはずである。

なるほど a. の事態確認の場合には、「холодно 寒い」と同様、Было п. inf.である。しかし、b. の位相を示す場合には、コーパス資料の示すところでは、動詞 статься (完了体「~なる」)-становиться (不完了体「~なっていく」)と共起する例は皆無である。これらの動詞は無人称文において位相を示すもっとも典型的なものである。これら以外の動詞が用いられる場合(たとえば、наступить)でも、

動詞が単数中性形を取る例はない。そうすると、伝統文法的観点からは、無人称文「пора+不定形」の位相を示す表現手段がないことになる。

この事態はどのように解釈すべきだろうか。

### 3.4.2. 文のパラダイム

ここで我々は、シュヴェードヴァが規範文法の原典（70年版アカデミー文法）の中で提起した文のパラダイムという考え<sup>26)</sup>とゾーラタヴァが主張する統語形式の機能という考え<sup>27)</sup>を援用したい。

シュヴェードヴァは、語が語彙的意味を変えずに格変化するように、文の基本形(文型 структурная схема предложения)が、命題的意味を変えずに、構成要素や様々な意味の添加削除により変化すると考え、一定数の文型から現実存在する多種多様な文の生成過程を説明した。

我々の扱う「пора+不定形」の構造が属す単文に限定して紹介しよう。

単文は直説法現在形を基本形とし、完全な場合には7形からなるパラダイムをなす。すなわち、現実法（統語的直説法）は3形（現在形、過去形、未来形）と非現実法は4形（仮定法 сослагательное наклонение、当為(義務)法 долженствовательное наклонение、希求法 желательное наклонение、命令法 побудительное наклонение）である<sup>28)</sup>。

各変化形は、通常の変化形である正規形（非バリエーション形）以外に異形（バリエーション形。参照:異音）をもつことがあり、こうして様々な現実世界の必要に対応する。ただし、あらゆる文型が7つの変化形すべてを持つわけではなく、「пора+不定形」の構造は、1)бытьをとる場合には、当為法を除く6形、2)半自立語(例. оказалось～であると判明した)を取る場合は、直説法の3形と非現実法では仮定法の合計4形しか持たず、命令法の形はないとする。

シュヴェードヴァの考えを示したのが、下図である（п.,inf.はそれぞれ пора,不定形の略である）。

#### シュヴェードヴァの体系

1) бытьをとる文	2)半自立語（оказаться）を取る文
現実法（統語的直説法）	
現在形 П. inf.	П. оказывается inf. <sup>29)</sup>
過去形 П. было inf.	П. оказалось inf.
未来形 П. будет inf.	П. окажется inf.
非現実法	
仮定法 П. было бы inf.	П. оказалось бы inf.
命令法 Пусть п.будет inf.	なし
Чтобы п.было inf.	
希求法 Было бы п. inf.!	なし

彼女は пора を用いたパラダイムの例を示していないが、彼女の考えを敷衍すれば、1)быть を取る文と 2)半自立語を取る文は、異なるパラダイムになる。その際、動詞が女性形をとるか中性形をとるかはゆれ<sup>30)</sup>の問題であると片付け、

それ以上の考察を加えていない。そもそも彼女の 1)と 2)は区別の根拠が不明確で、かつ関係が曖昧すぎる。

我々のコーパス資料の示すところでは、動詞の過去形が、1)の場合には女性形の例は一切なく、2)の場合には中性形が一切ない。つまり、揺れは全く生じていないのである。

シュヴェードヴァの考え（過去形の場合。\*印は実例が存在しない事を意味する）

ゆれ \*Пора была спать.

1)Пора было спать. 2)Наступила пора спать. \*Наступило пора спать.

コーパス資料の結果（過去形の場合） ゆれは存在せず

1)Пора было спать. 2)Наступила пора спать. Наступила пора спать.

一方、ゾーラタヴァは、形態に基づく統語構造と意味構造との関係を検討し、両構造は必ずしも一対一に対応をするものでなく、時に交差するという事実から、機能に基づく独自の統語論を提起している。つまり、形態的観点から文構造が異なっても機能の点では同一視できるものがあるというのである<sup>27)</sup>。

我々の場合も、同じように考えられる。

### 3.4.3. 準無人称文

文(2) Пришла пора собирать грибы.の пора が、もし純粋な名詞として機能するのであれば、形容詞の修飾語を取る例が一定数あるはずであるが、そのような例は1例もない。名詞性が幾分失われているのである<sup>31)</sup>。

さらに別の事実もある。文(1) Пришла грибная пора.の пора (名詞)であれば、本論 32 ページの述語動詞一覧に示す往来発着を表す動詞と自由に共起する。しかし、文(2)の пора と共起するのは下線を施した語、すなわち、最も中立(機能動詞)的に位相を示す語のみである。

シュヴェードヴァは、П. было бы спать.を仮定法の例とする。しかし、コーパス資料によれば、было быの形式をとる例は一例しかなく、それ以外は他の叙想語による無人称文と同様、пора быの形式を取る。これも文(2)の型が無人称文化していることを示す例と言える。

上述のように、過去形の位相を示す形では、動詞は女性過去形しかありえない。したがって、文(2)は事態確認を表す無人称文 Пора собирать грибы. (きのこ狩りをする時だ)と相補分布をなし、その位相変化形とみなしうる。事実、この文の意味機能「～する時だ」も同一である。

それゆえに形態的制約（本来女性名詞 пора が主語）が動詞の過去形を、中性ではなく、女性形に決定づけているという一点を除けば、文(2)は機能的に無人称文と考える方が現実を説明できる。

ところで、このような仮説の正当性は語彙意味論、統語論の観点から裏付けられるだろうか。

まず、語彙意味論である。

文(2)においては、пора の意味解釈に変化が生じている。つまり、文(1)では пора

は、季節、時間帯を表すが、文(2)では季節、時間帯ではなく、状態変化の瞬間、時刻を表す。これは、下に見るように、純粋な無人称文(3)とされる場合と同じ現象である。

	すでに	時	寝る	
(3)	Уже	пора	спать.	もう寝る時間です。
	副詞	述語副詞	不定形	

次に統語論的観点である。コーパス中には下のような例が散見される(たとえば、76, 367, 929 番の例)<sup>32)</sup>。この例では、主体(訳文で、これらの範疇の国家に、)が与格で表されている。これは人称文においてはありえず、無人称文の特徴の一つである。

Идеология антиколониализма существенно определяла многие стороны мировой жизни, политики, экономического развития, общественного сознания. Она охватила период в пару десятилетий, не менее, когда с колониализмом практически было покончено и странам этой категории уже настала пора определять свою принадлежность к одному из мировых центров силы. (名詞分析の76番の例)

反植民地主義のイデオロギーは世界の生活、政治、経済の発展や社会意識の多くの側面を本質的に規定してきた。それは、植民地主義に終止符が打たれ、これらの範疇の国家に世界のパワーポリティクスの中心のどこに組するかを決定する時がようやく訪れるまで、少なくとも二十年の期間にわたったのである。

こう見てくると、文(2)は、伝統文法の規定およびシェヴェードヴの説とは異なり、機能的に無人称文「пора+不定形」の位相変化とみなさなければならないことになる。もちろん、名詞性を残すこのような文と無人称文の両者を完全に同一視は出来ないが、機能的には等価物として、分析の対象にしなければ、分析は現実を解析することにはなり得ない。

フォーサイス、ラッスードヴァが、「пора」の名詞性を意識しすぎるあまり分析対象から外し、シェヴェードヴァが名詞性を無視したのは問題であろう。本論ではこれを準無人称文として分析対象に含め、より包括的にこの構造を検討する。(pp. 36-38の表2~表6.)

次に、我々の構造の述語となる動詞(半自立動詞も含む)の考察でこのことを確認しよう。

### 3.5. 「пора+不定形」を導く動詞の意味分析

3.4.1でбытьおよびその変化形が事態確認に用いられる場合は問題がないことが判明したので、それ以外の場合を調査した。ロシア語詳解辞典(国語辞典)<sup>33)</sup>で、名詞пора(時期)と用いられる動詞を選び、下に記した。

述語動詞一覧 ダッシュの左が完了体、右が不完了体である。[ ]内は例文の数を示す。

Закончится, закончилась なし	—заканчивается, заканчивалась (幕をとじる, 終わる) —начинается, начиналась (始まる)
Кончится, кончилась	—кончается, кончалась (終わる)
<u>Настанет</u> [2], <u>настал</u> [48]	—настает, наставала, будет наставлять (いたる)
<u>Наступит</u> [1], <u>наступила</u> [2]	— <u>наступает</u> [2], <u>наступала</u> [1] (到来する)
<u>Придет</u> [5], <u>пришла</u> [102]	— <u>приходит</u> [4], приходила (到着する)
<u>Пройдет</u> , <u>прошла</u>	—проходит, проходила (通過する, 終わる)
Уйдет, уша	—уходит, уходила (去る)
Приблизится, приблизилась	—приближается, приближалась (近づく)
<u>Подойдет</u> , <u>подошла</u> [1]	— <u>подходит</u> [0], <u>подходила</u> [1] (近づく)
	<u>Будет</u> [1] (～である, いる, ある→なる)

我々の構造と共起したのは下線を施した動詞だけであつた。また過去形において中性形を取った動詞はなかつた。

この資料の示す限り、名詞 *пора* (時期) と同じ時期、時間を表す *зима* (冬) などと自由に共起する *сидеть* (居座っている), *стоять* (続いている) のような状態動詞は、皆無である。状態動詞とされる *быть* (英語の *be* 動詞) の未来形 *будет* が 1 例 (782 番の例文)<sup>34)</sup> 現れるが、これも意味解釈に変化が生じて「～になる」を表している。

ここで注目に値するのは、位相 (局面) 動詞の中で、*продолжается* (続いている) のような継続を表す動詞がないことである。

共起する動詞は、開始・終了と往来・発着、つまり変化を表す動詞のみであり、意味分析および辞典の記述<sup>35)</sup>によれば、意味要素に開始の要素をもつものばかりである。

辞典 (Лопатин, Владимир В.:1990) の記述の例を下に示そう。

Настать = о времени, состоянии: начать, наступить.

時間, 状態について 始まる, 訪れる

そもそもある状態 (事態) から別の状態 (事態) への移行の信号となるのが *пора* であり、*пора* は状態 (事態) 切り替えの瞬間を示す。それゆえ、持続状態や継続状態を表す動詞と共起しないのは当然なのである。

### 3.6.1. 「пора + 不定形」と存在論的カテゴリー

本節では *пора* と共起する動詞の類別をおこなう。まず動詞分類である。現代の動詞分類はマースロフ以来数多くの研究者によってなされ、近年極めて精緻なものになってきている<sup>36)</sup>。

しかし、我々の分析対象は *пора* (～するときだ) と共起する不定形なので、用いる動詞分類は、状態、場面の変換という意味を核としたものでなければならない。

一般に言語外現実の事象はすべて、状態 *состояние*、出来事 *событие* それに過程 *процесс* の 3 つの存在論的カテゴリーとして捉えられる<sup>37)</sup>。これは個別言語を問わず同じである。このカテゴリーが個別言語で様々に言語 (記号) 化されるが、

ロシア語という個別言語においては、状態動詞、出来事動詞、それに過程を表す動詞に反映し、それはさらに完了体と不完了体に区分けされて行くのである。

体とそれぞれの動詞の関係を考えるならば、完了体は常に動作動詞であり、ペルフェクト的用法の場合のみ状態を表現する。完了体の場合、意味論的レベルでは特別な共起制限はない。不完了体の場合には、状態動詞、出来事動詞、それに過程を表す動詞のすべてが存在する。純粋な状態動詞は、完了体の対（ペア）を持たない。そこで完了体の対を持たないことが状態動詞の一つの大きな特徴となる。

我々の扱っている「пора+不定形」は状態（事態）の変換（=動作着手）という意味上、一定時間内での均質な状態の持続を表す状態動詞とは共起しない事が予想される。一方、グロヴィンスカヤは一般的事実の意味を持たない動詞グループとして移動動詞の定動詞（идти, ехать など）をあげている。我々の扱う動作着手の意味は、一般的事実の意味の一つの現れであるので、定動詞も共起しない事が予想される。

では、資料（資料3）<sup>6)</sup>をみよう。確かに、共起するのは動作動詞が圧倒的である。しかし、予想とは異なり、下のように、状態動詞とされるものが散見され、定動詞 идти も高頻度で出現する。これらの動詞は、いずれもが純粋な体の対をなす完了体動詞を持っていない。

準無人称文 — 「любить」（愛している）

無人称文 — пора бы を含むものでは、「жить」（生きている）

пора бы を含まない無人称文には、のべ語数 1292 語、異なり語数 453 語の膨大な数の不定形がある。物理的制約から 1 回しか現れない語を除く、上位 207 語までの不定形を検討したが、その中の状態動詞は以下である —

「спать」（眠っている）<sup>38)</sup>、「быть」（いる、ある）、

「иметь」（所有している）、「жить」（生きている）

ここで注意しなければならないのは、語と語彙素の峻別である。同じ動詞といっても、仔細に検討してみると、この構造に組み込まれると、動詞の語彙素の意味解釈に変化が生じてくるのである。

無人称文で用いられた「спать」の場合も、（眠っている）という語彙の意味解釈に変化が生じ、状態の変化ないしは開始の意味（眠る、就寝する）になっている。

Шумный вечер в гостеприимном доме проходит незаметно. Пора спать.

（例 157 番）

客好きな家での賑やかな晩のパーティはあっという間に過ぎて、寝る時になる。

このような、語彙解釈における変化（状態の意味から状態開始の意味へ）は、どこから生ずるのであろうか。該当の例すべてに共通な唯一の条件である「пора+不定形」の構造自体に起因すると考えるのがもっとも自然な解釈であろう。すなわち、この構造は、変化、つまり、新しい状態（事態）の開始の意味要素を含

むということになる。

これを次節で別の側面から検討しよう。

### 3.6.2. 不完了体の付加的意味—動作着手の意味

ここではまず無人称述語 *пора* のもつ論理構造というものを考えてみたい。*пора* は周知のごとく<sup>39)</sup> 叙想 (modal な) 語である。しかも、話し手が、話し手の認識する現実の現象 (言語外現実の現象) を現実の事実として言語に表現する直接法的な語ではない。そうである以上、その表す叙想的な概念、特に、義務や必然性は、変化を前提とする。

このことをロシア語の法と上述の 3.6.1. の動詞の類別との関係で確かめよう。動詞で叙想性を表す文法形式が法だからである。3.4.1. で見たように、ロシア語の法は現実の事実を表す現実法とそれ以外に二分され、それがさらに下位区分される。

下の模式中で○印は語形の存在を示し、△は存在するのが普通、×は存在しない事を表す。もちろん、模式ゆえの粗さはあり、厳密にはもっと複雑な様相を示す。

	現実法	非現実法	
	直説法	命令法	仮定法
出来事動詞	○	○	○
過程動詞	○	△	△
状態動詞	○	×	×

純粹に状態動詞とされるものには命令形がない。仮に形態的に存在する場合でも、命令法に組み込まれると法の意味の制約で意味解釈に変化が起こる。それゆえ、上記の模式は動詞というより、動詞語彙素の模式というべきで、語彙素が動詞という形を取って言語化する時、意味以外の様々な要因から、模式とずれる事態が生じるのである。

もっとも変化になじまない状態動詞のうち、典型的な状態動詞とされる *сидеть* (坐っている) の命令法の例を見よう。ちなみに、この動詞には対となる完了体は存在しない。

#### 動詞二人称命令形

*Сидите.* 坐っていなさい。

これは坐り続けると予想される相手に対してではなく、立ち上がりかける、あるいは立ち上がる事が予想される事態で発せられる現状変化阻止つまり、零変化の要求である。だから、むしろ「立たないで」の意味に近い。

*пора* の構造の意味は、現実の改変、変化時点を指摘する点で極めて命令法に近い。この構造が命令法同様の叙法 (非現実法) に属し、それゆえ共起する動詞不定形は圧倒的に動作動詞であり、過程動詞、状態動詞の場合は意味解釈に変化が起きるのである。



存在する（表 2，表 3）と，不完了体不定形の比率が相対的に高まる。

表 2 準無人称文「пора+不定形」における完了体と不完了体の比率

	完了体	不完了体	合計（100%）
Пора бы+不定形	0	0	0
Уже 動詞 пора+不定形	0	7(100%)	7
Не пора ли+不定形	0	0	0
上記以外	84(53.8%)	72(46.2%)	156
合計	84(51.5%)	79(48.5%)	163

(3)純粋な無人称構造「пора+不定形」の場合においても，状況語(уже)がпораの前に存在すると不完了体不定形の比率が高まっている。

表 3

Уже пора+不定形	16 (36.4%)	28 (63.6%)	44 (100%)
--------------	------------	------------	-----------

一方，叙法(modality)が前面に出る場合はどうであろうか。

(4)客観的叙法である仮定法のпора бы(もういい加減で絶対に)，および主観的叙法である不確定性(疑惑，逡巡)の表現 не пора ли(～ではないのか)と共起する場合には逆に完了体の比率があがっている<sup>43)</sup>(表 1，表 4，表 5，表 6)。

表 4 「пора бы+不定形」における完了体と不完了体の比率

	完了体	不完了体	合計
Пора быのみ+不定形	37(90.2%)	4(9.8%)	41
Пора бы и+不定形	4(57.1%)	3(42.9%)	7
Пора бы уже+不定形	9(100%)	0(0%)	9
合計	50(87.7%)	7(12.3%)	57(100%)

以上の結果を総合したのが表 5 である。

表 5 「пора+不定形」における完了体と不完了体の比率

	完了体	不完了体	合計
準無人称文のпора	84(51.5%)	79(48.5%)	163
純粋に述語副詞			
Пора быなし	704(54.5%)	588(45.5%)	1292
Пора быあり	50(87.7%)	7(12.3%)	57
合計	838(55.4%)	674(44.6%)	1512 (100%)

### 3.8. 「пора+不定形」における体の意味

これまで暗黙の了解として，先行研究にならい，一般的事実の意味から動作着手の意味が派生するという考えを踏襲してきたが，ここではコーパス分析の結果から不定形の意味を再検討しよう。

一般に，述語動詞の表す動作は，一定の5W1H(動作主体，対象，時，所，原

因・理由，様態一回数，強度，速度など）の下で行われ，ロシア語の場合にはさらに体的視点が加わる．しかし，具体的な言語使用の場で（発話主体の認識において）は，その要素すべてが前面に現れるのではなく，状況，文脈，文の構造の制約で，なんらかの要素は背景に退く．

「пора+不定形」の構造における不定形，とくに不完了体を中心に考えよう．

不完了体である以上，具体的な言語使用の場では 2.2. に示した個別的意味の一つとして現れるはずである．コーパス資料と照合してみると，この場合の不完了体は，具体的過程（～している最中）の意味でも，無限定反復（何度も何度も反復～する）の意味でもない．事実，回数を示す状況語（раз「～回」，по+与格「～毎に」，часто「しばしば」，иногда「ときどき」，всегда「いつも」，то и дело「しきりに」）と共に起す例はない．これはすなわち，一般的事実の意味を持つということになる．

一般的事実の意味といえば，具体的な場では様々な現れ（разновидность）方をする．その現われとしてザリズニャクは下の 4 つ意味，グロヴィンスカヤは 4) 以外の 3 つをあげている<sup>44)</sup>．

- |                                     |                           |
|-------------------------------------|---------------------------|
| 1) общефактическое результирующее   | 結果を持つ一般的事実の意味             |
| Я тебя предупреждал.                | 僕は，君に言うておいたはずですよ．         |
| 2) общефактическое двунаправленное  | 結果消滅の一般的事実の意味             |
| Ты сегодня открывал окно?           | 今日君は窓を開けたの（現在はしまっている）．    |
| 3) общефактическое нерезультирующее | 結果未達成(非限界動作)の一般的事実の意味     |
| Я умолял ее вернуться.              | 僕は彼女に帰るよう懇願したのですが（無理でした）． |
| 4) общефактическое неопределенное   | 非限界的な一般的事実の意味（中断された動作状態）  |
| Вчера шел дождь.                    | きのうは雨が降っていた（すでにやんでいる）．    |

ところが，「пора+不定形」の不完了体不定形は上のどれにも完全に当てはまるものがない．ということは逆に，1)～4) の現れすべてに共通する要素，すなわち，動作の名指しの意味しか持たないことになる．ここでは不完了体は不定形であって，文の述語でないので当然であるが，5W1H のすべて（一般的事実の意味がときに持つとされる結果についての言及も）を捨象し，言語記号（動詞不定形）ならばもつはずの最低の機能，すなわち，動作事実を名指すことしかしていないことになる．

コーパス資料の分析結果からも，この構造では，動作着手時点の指摘（пораの機能）+動作の名指し+動作の実現を時間的に促進するだけの場合には不完了体が現れるといえる．従来，不完了体の一般的事実の意味と動作の名指し（動作事実の有無，動作の種類）の指摘）の関係は曖昧に記述されるだけであったが，我々の構造に関する限り，一般的事実の意味とは，動作の名指しのことであるといえ

る。

一方、完了体のほうは、動作着手時点の指摘＋動作を名指すだけでなく、さらに絶対性、不確定性などの意味・ニュアンスを表すことが観察された。これを示すのが下図である。

	пора	不完了体不定形
不完了体	= 時点指摘 + [名指し機能 (+ 切迫性)] → 動作着手の切迫性	
	пора	完了体不定形
完了体	= 時点指摘 + [名指し機能 + 叙想性 (絶対性等)] → 動作着手の絶対性等	

最後に、先行研究の結果との乖離についてである。フォーサイスの研究結果とのずれは、基礎資料の相違によると思われる。彼は我々同様、資料を文章語に求めたが、彼の場合は、もっぱら文学作品のデータに依拠している。我々の場合も、文学作品に資料を限定すれば、不完了体の使用比率が高いのである(表6)<sup>45)</sup>。

表6 文学作品中の「пора＋不定形」における完了体と不完了体の比率

	完了体	不完了体	合計
Пора бы	7(77.8%)	2(22.2%)	9
Пора	120(36.9%)	205(63.1%)	325
合計	127(38.0%)	207(62.0%)	334 (100%)

ラッスードヴァの場合、引用例から判断すると、分析対象は話し言葉である。文学作品の場合も、新聞雑誌の客観的報道、描写に比べると、会話文の比率が高い。

会話文の場合には、話し手は、具体的な時と所を常に意識させられる事が多い。相手を促したり、未着手の行為にいらいらする。つまり、状態(事態)変化に向けてメンタルパスを設定しやすいので、より余計動作の着手を促進させる状況が多い、すなわち、不完了体の比率が高くなると推断される。しかし、これらの厳密な検討はこれからである。

#### 4. まとめ

現代ロシア語文章語における「пора＋不定形」に関する限り以下のことが言える。

- 1 「пора＋不定形」の構造では時の状況語の存在などで比率が変わる場合も存在するものの、一般的に完了体の出現比率が高い。
- 2 「пора＋不定形」の構造の不定形には状態動詞はまれであり、その場合も動詞語彙素の解釈に変化が生じ、出来事の意味になる。
- 3 「пора＋不定形」の構造は変化、開始の意味要素を含むと意味解釈が可能である。

この構造に現れる不定形全数のより厳密な分析を行うこと、調査対象を話し言葉にも拡大すること、義務、強制、切迫性などの意味要素の精査、その相互関係

の厳密な規定，語りの時間と説明の時間の峻別，認知的アプローチの検討などは別の機会に譲りたい。

#### 注

- 1) 本論では適宜，ロシア語学の用語に対応する一般言語学の用語を[ ]内に記す。
- 2) 中澤英彦(1988:73-86)，中澤英彦(1994:75-83)を参照のこと。
- 3) See Jakobson(1984:41-58).
- 4) See Гловинская(1982:7-19).
- 5) ロシア語学では形容詞は形態的に性，数，格による格変化をするものという定義があり，意味的に形容詞に近くともいわゆる無人称文の述語となるものの一部には，そのような変化がないことから述語副詞といわれる。
- 6) <http://www4.plala.or.jp/hanamizuki/result/index.htm> (2005年3月18日完成) 参照。  
内容は，「電子コーパスの全体」，「述語副詞 *пора* ( *бы* を取らないもの) + 不定形」  
「述語副詞 *пора бы* + 不定形」，この構造に現れる不定形の全リストおよび頻度数別リストである。
- 7) 80年版アカデミー文法では，一般的意味をラングにおける意味，個別の意味以下をパロールにおける意味とする。See Бондарко(1980:604-613)
- 8) フォーサイスは一般的事実の意味を不完了体の一般的意味とする。See Forsyth(1970:6).
- 9) See Бондарко(1971:21-42), Маслов(1984:71), Vendler(1967: 97-121), Зализняк & Шмелев(2000:36-43), Гловинская(1982:7-19) etc.
- 10) See Маслов(1959:231-236, 239-245, 251-271, 307-312).
- 11) 例文と訳に付された記号，下線は対応することを示す。
- 12) See Рассудова(1982:11-12, 144-145).
- 13) See Маслов(1984:70-84).
- 14) 「*пора* + 不定形」の結合は，文にも，句にもなる。また無人称文の場合も人称文の場合もありうる。それらを包括して本論では構造と記す。
- 15) この構造でもし不完了体が用いられる場合，同じ状況を命令形で言う場合も，不完了体が用いられることが知られている。
- 16) これら叙想語が，不完了体の不定形と用いられて，時の意味を表す時には，ほとんど *пора* と同義的と解釈される。See Рассудова(1982:101).
- 17) See Галкина-Федорук(1958:321).
- 18) See Бойко(1973), (1997).
- 19) See Forsyth(1970:271-272).
- 20) See Рассудова(1982:99-106).
- 21) 小川暁道(2004)を参照のこと。
- 22) See Forsyth(1970:271).
- 23) ラッスードヴァは「*пора* + 不定形」を扱った箇所では，ニュアンス *оттенок* と意味 *значение* を峻別していない。See Рассудова(1982:99-106).
- 24) 36ページの表4の集計結果を参照のこと。
- 25) 例文は2008年3月5日 [www.good-cook.ru/vtoroe/vtoroe\\_106.shtml](http://www.good-cook.ru/vtoroe/vtoroe_106.shtml), [magazines.russ.ru/ural/2004/12/le85.html](http://magazines.russ.ru/ural/2004/12/le85.html) による。
- 26) See Шведова Н.Ю. (1970:546-547, 577, 593).
- 27) See Золотова(1973:96-97).

- 28) 非現実法をここまで細分するのは伝統的なロシア語学では稀であり、この区分は意味に頼っているといえよう。
- 29) このモードはシュヴェードヴァの考えを敷衍して我々が作成した。
- 30) コーパス資料には *оказалась(оказалось)* の例は一例もなかった。
- 31) 小川によれば一例ある。小川暁道 (2004:244) を参照のこと。
- 32) 例文の番号はウェブ上にアップロードした資料 1, 及び 2 の番号を指す。
- 33) See АНСССР(1983), Лопатин, В.В., Лопатина, Л.Е. 1990., Ушаков(1940), etc.
- 34) 動詞分類における実例は全てアップロードしたコーパス資料 3 参照。
- 35) 我々はグロヴィンスカヤと同じ分析を行った。See Гловинская(1982:37-46), Лопатин, Владимир В., Лопатина, Людмила Е.(1990:282-283).
- 36) See Падучева(1983:332-342), Гловинская(1982:23-33).
- 37) この部分は, Зализняк, А.А., Шмелев, А.Д.(2000:35-36). を参考に我々が考察した。
- 38) *спать* は文献により状態動詞, 動作動詞いずれにも分類されるなどゆれがある。そこで我々は存在論的カテゴリーを援用した。See Гловинская(1982:24-33).
- 39) See Максимов, В.И., Одеков, Р.В.(1998:74), Плотникова, В.А.(1997:368-369), etc.
- 40) See Рассудова (1982:99-106).
- 41) еще と共起する例はコーパスでは一例しかなく, 省略した。
- 42) 山本雅子を参考にした。山本雅子 (2007:1-22) を参照のこと。
- 43) [не + 不定形 + ли] の構造では完了体が用いられることが知られている。
- 44) この部分は, Зализняк, А.А., Шмелев, А.Д.(2000:26), Гловинская(1982:231-244) を参考に我々がまとめた。
- 45) 小川も同様な結果を導いている。小川暁道 (2004:242-245) を参照のこと。

#### 参考文献

- 中澤英彦 1988. 「完了体のいわゆる例示的な意味によせて(1)」『ロシア語研究』N1. 1988年. 東京. 《木二会》.
- 中澤英彦 1994. 「現代ロシア語における動詞完了体による反復性と例示的意味の表現によせて」『東京外国語大学論集』48. pp. 75-93.
- 小川暁道 2004. 「ロシア語の *pora* と共起する動詞不定形の体について—コーパスを用いた数量的考察」『コーパス言語学における構文分析』言語情報学研究報告 3. 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
- 山本雅子 2007. 副詞表現の認知的意味機能「もう」「まだ」「ついに」「とうとう」『言語と文化』16, 愛知大学, pp. 1-22.
- Бондарко, Александр В. 1971. *Вид и время русского глагола*, М.: Просвещение.
- Бойко, Анна А. 1973. *Сочетания с инфинитивом несовершенного вида в современном русском языке*, Ленинград: Издательство ЛГУ.
- Бондарко, Александр В. 1980. «Употребление видов», *Русская грамматика*, Москва: Наука.
- Бойко, Анна А. 1997. *Словарь-справочник*, СПб: Издательство Разумовой Н.А.
- Галкина-Федорук, Евдокия Ф. 1958. *Безличные предложения в современном русском языке*, Москва: Издательство МГУ.
- Гловинская, Марина Я. 1982. *Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола*, М.: Наука.
- Гловинская, Марина Я. 2001. *Многозначность и синонимия в видо-временной системе*

*русского глагола*, Москва: Русские словари.

Зализняк, Анна А., Шмелев, Алексей Д. 2000. *Введение в русскую аспектологию*, Москва: Языки русской культуры.

Золотова, Галина А. 1973. *Очерк функционального синтаксиса русского языка*, М.: Наука.

Маслов, Юрий С. 1959. Глагольный вид в современном болгарском литературном языке.- В сб.: *Вопросы грамматики болгарского литературного языка*, М.: АН СССР.

Маслов, Юрий С. 1984. *Очерки по аспектологии*, Л.: ЛГУ.

Падучева, Елена В. 1998. "Семантические источники моментальности русского глагола в типологическом ракурсе", in *Типология вида/проблемы, поиски, решения*, Ed. by М. Ю. Черткова, Москва: Языки русской культуры.

Рассудова, Ольга П. 1982. *Употребление видов глагола в современном русском языке*, М.: Русский язык.

Шведова, Наталия Ю. 1970. «Простое предложение», *Грамматика современного русского литературного языка*, Москва: Наука.

Forsyth, James. 1970. *A grammar of aspect: usage and meaning in the Russian verb.*

*Studies in the Modern Russian Language, extra volume, Cambridge: University Press.*

Jakobson, Roman. 1984. *Russian and Slavic Grammar Studies 1931-1981*, Berlin • New York • Amsterdam: Mouton Publishers.

Vendler, Zenon. 1967. «Verbs and Times», in *Linguistics and Philosophy*, Ithaca NY: Cornell University Press.

#### 国語辞典類

АН СССР Институт русского языка. 1983. *Словарь русского языка в четырех томах*, М.: Русский язык.

Лопатин, Владимир В., Лопатина, Людмила Е. 1990. *Малый толковый словарь русского языка*, Москва: Русский язык.

Максимов, В. И., Одеков Р. В. 1998. *Учебный словарь-справочник русских грамматических терминов*, Спб.: Златоуст.

Плотникова (Робинсон), В. А. 1997. *Предикативы*, *Русский язык/энциклопедия*, Ed. by Ю. Н. Караулов, Москва: Дрофа.

Ушаков, Дмитрий Н. 1940. *Толковый словарь русского языка под редакцией про. Ушаков, Дмитрий Н.*: Советская энциклопедия.

#### 謝辞

コーパス作成に際して成定久美子氏（2005年当時東京外国語大学大学院前期課程在籍）が献身的に協力して下さった。記して深甚なる感謝の意を表明したい。

К вопросу о виде и лексическом значении глагола в конструкциях  
"пора и инфинитив"

Хидэхико НАКАДЗАВА

В настоящей статье рассматриваются вопросы соотношения семантики вида и лексических значений глаголов на примере недостаточно изученных конструкций с предикатом *пора* и инфинитивом.

В данной работе также исследуется проблема разграничения безличных и личных предложений, выделяются типы лексических значений глаголов-сказуемых в вышеуказанных конструкциях.

При анализе используется электронный корпус текстов, собранных из различных газет, литературных произведений и журналов восьмидесятых и девяностых годов XX в., объем которого достигает 450 МВ. В этом корпусе имеется 1512 предложения, содержащего конструкцию «*пора* плюс инфинитив».

В русской аспектологии до сих пор считалось, что в вышеупомянутых конструкциях преобладают инфинитивы несовершенного вида. Так, согласно Джеймсу Форсайту, который проанализировал эти конструкции, «sentences with the predicator *пора* «it is time» tend to have imperfective infinitives (предложения с предикатом *пора* чаще содержат инфинитивы несовершенного вида)» [Forsyth: 1970].

Исследователи русского синтаксиса отчетливо различают предложения с предикативным наречием и предложения с *пора* в позиции подлежащего, опираясь только на морфологические и синтаксические категории.

В результате настоящего исследования, основанного на корпусных данных, мы пришли к следующим выводам, некоторые из которых опровергают взгляды, до сих пор разделяемые многими аспектологами:

1. Предложения с предикативом *пора* чаще содержат инфинитивы совершенного вида.
2. В предложениях с существительным-подлежащим *пора* редко употребляются стивные глаголы.
3. Инфинитивы при предикативном наречии *пора* содержат в себе семантический элемент изменения или начала процесса.